

Dé-Sign (脱記号) 22 —記憶のマチエール3— 映像学科 大津はつね

Dé-Sign 22 — “La Matière de Mémoire #3” — Department of Imaging Art OHTSU Hatsune



平成元年から毎年制作を続けているデ・サイン（脱記号）シリーズの22作目。

2009年から「記憶のマチエール」というタイトルで、戦前から現代まで、生き抜いて来られた方々の「記憶の地層」を映像化する試みを行っている。今回は、立場の全く異なる男性3名の方に、それぞれの戦争体験を語って頂いた。

一人目は、精神カウンセラーの林口春次氏である。林口春次氏は、昭和20年、海軍少年飛行兵として大戦を迎える。その後、雑誌社、新聞社勤務を経て、近年はボランティアで不安障害や鬱病患者のカウンセリングを行っておられる。戦時下で一番記憶に残り今まで誰にも話したことがないという大阪・西宮での空爆後の光景について語って頂いた。二人目は、元陸軍大尉の信太正好氏である。氏は、戦時中、陸軍大尉として、陸軍士官学校の馬術教官を務めていらした。軍人としての生活、そして終戦、現代日本の状況と展望について語って頂いた。信太氏は「当時は士官であったため、至近距離で機銃掃射を受けても全く恐怖感は無かった。」と語る。三人目は、現役パフォーマーの黒田オサム氏である。黒田氏は「ホイト芸」という独自のパフォーマンスを長年続けておられる。戦時中に少年だった黒田氏は、玉音放送の時の記憶や、「ホイト芸」という言葉の由来について語って頂いた。氏は今も「自由ほど尊いものはない」と強く語る。彼らの封印された戦時下の鮮烈な記憶が、今蘇る。3人の<記憶のマチエール>の差異から、我々は何を見るのだろうか。

本作制作中に、東日本大震災が発生した。テレビから放映された凄惨な東北太平洋沿岸地域の様子や福島第一原子力発電所の事故による現在進行中の悲惨な事態は、まるで戦場跡のようで、本作に登場して頂いた3名が語られた当時のお話が、どこかでリンクしていると強く感じた。本作品の「都心を俯瞰した空撮映像」でさえも、この東日本大震災の後では、まるで意味が変わってしまったように思える。

平和な日常は、一瞬にして消え去る。改めて、彼らの戦時中の体験や言葉から、日本の「今」が垣間見えるようと思えてならない。

#### スタッフ・キャスト

制作：ビジュアル・ブレインズ（風間 正+大津はつね）Visual Brains (KAZAMA Sei + OHTSU Hatsune)

カメラ：大津はつね (OHTSU Hatsune)、大津伴絵 (OHTSU Tomoe)、田中綾子 (TANAKA Ayako)

出演：信太正好、林口春次、黒田オサム (SHIDA Masayoshi, HAYASHIGUCHI Haruji, KURODA Osamu)

音楽：クリストフ・シャルル (CHARLES Christophe)、風間 正 (KAZAMA Sei)

翻訳：ダニエル・E・クラーク (Daniel E Clark)、平山 誠 (HIRAYAMA Makoto)

2011/ビデオ/カラー/16分



